資料

バンジャマン・コンスタン『征服の精神と簒奪――ヨーロッパ文明との関わりにおいて』(七)

堤　林　剣／堤　林　恵　訳

七　第二部　簒奪について

第一一章　人間存在のさまざまな部分に恣意的支配が及ぼす影響について

恣意的支配は、その行使がただ一人の名においてであれ全体の名の下であれ、いずれにせよ人間を平安と幸福に至るあらゆる道程まで追及してやまない。

恣意的支配は道徳を滅ぼす、なぜなら安全なしにはいかなる道徳も存在しないからだ。愛着の対象がその潔白を守りとして隠れ家に身を休めるという確信がなければ、どんな優しい愛情もありえない。恣意的支配が疑わしい人物を躊躇なしに攻撃するとき、迫害されているのは個人だけではなく、この支配がまず憤怒を招き、しかるのち堕落させるところの国民全体なのである。人間はいつでも苦悶を逃れようとする。愛するものが脅かされているならば、愛するのをやめるか守るかのどちらかだ。デ・ポー氏が述べている。[1] ペストに襲われた村において風紀は突然に頽廃する、そこでは死にかけた者たちが互いに盗み合うのだ、と。道徳にとっての恣意的支配とは身体にとってのペストである。誰もみな、自分にすがろうとする不幸な仲間を追い払う。かつての生活における繋がりを公然と断ち切る。身を守るために孤立し、助けを請う弱さや友情のうちにも自分の安全に対する障碍のほか何も見ない。変わらぬ価値を保っているものはただ一つだけ――それは世論ではない、強者の栄光も犠牲者への敬意ももはや存在しない。それは正義で

もない、法は無視され形式は蹂躙されている――ただ一つ変わらぬもの、それは富だ。富裕は暴政に武装を解かせることができる。政府の役人のある者たちを堕落させ、禁則を軽くさせ、逃亡を容易にし、絶え間ない脅しに晒されている日々の生活にもちょっとした束の間の快楽をちりばめることができる。人々は享楽するために貯え、避けがたい危険を忘れるために享楽する。他人の不幸には冷酷さをもって、自分自身のそれには無頓着で応じる。祝宴のかたわらで血が流れているのを眺め遣り、共感は極端な禁欲主義者のように押し殺し、放蕩と悦楽の喜びに溺れるのだ。

ある国民が次々と続く圧制の暴挙を冷淡に熟視する時、牢獄が溢れかえり国外追放の令状が増えていくさまを不平も言わずに眺めている時、このような唾棄すべき事例を目の前にして、廉直かつ高潔な感情を再び燃え上がらせるためには月並みな文句で十分だなどと考えられるだろうか？ 人々は父親のごとき権力の必要性に言及する、しかし息子の第一の義務とは虐げられた自分の父を護ることである。そして子供たちの間から父親を奪うなら、その子供らに臆病極まりない沈黙を強いるのならば、格率や法典、朗々たる演説、そして法律の果実はどんなものとなろう？ 人々は結婚の神聖さに敬意を表する、にもかかわらず密やかな告発やただの疑惑に基づき公安と称される手段によって、夫を妻から、妻を夫から引き剝がすのだ！ 政治権力の思うままに夫婦の愛情が消えたり点ったりするとでも思っているのだろうか？ 人々は家族の絆も褒め称える。だが家族間の繋がりの基盤は個人的自由であり、正義が市民に保障する保護のもと共に暮らし、自由に生きることに根ざす希望なのである。家族の絆というものが存在するならば、父親、子供たち、夫、妻、友人、恣意的支配の抑圧にあっている人々に近しい間柄の者たちが、このような支配に服従などするだろうか？ 人々は信用について、商業や工業について語る、だが逮捕された人間にはその財産を自分の財産の基盤としている債権者がおり、彼の事業に利害関係を持つ出資者たちがいるのだ。そうした人間を拘留することの影響は、ただ一時的に彼の自由を喪失させるというだけでなく、彼の投機の中断、もしかしたら彼の破滅さえもたらすのである。この影響は利害関係のあるすべての事業者にも及ぶであろう。そればかりではない、この影響はすべての意見に衝撃を与え、すべての安寧を動揺させるだろう。有罪であると確定せぬまま個人が被害を受けることとなれば、知性を失っておらぬ者は誰しも自分が脅かされていると感じるであろうし、それもまた正当である。なんと

なれば保証が崩壊してしまったのだから。人々は口を噤む、恐怖に囚われて――だがすべての商取引にその影響は滲み出る。地面は大きく揺らぎ、人々は怯えずにそのうえを歩むことができない。*

＊フランス国民が犯した大きな過誤のうちの一つは、かつて一度も個人的自由に十分な重要性を認めてこなかったという点にある。恣意的支配によって苦しめられれば人々はこれに対して不満を口にしたが、それも不正義というよりは過ちとしてであった。そして長きにわたるさまざまな抑圧の継起においても、自分と異なる党派に属する個人のために抗議する、というささやかな功績をあげた人物はほとんど存在しなかったのである。私はあいにく、これまでに次の点を指摘した著述家がいたかどうかを知らない。モンテスキューは、個人の所有権は国益に反してまでも力強く擁護したが、それに比べて個人の自由を扱う際にはひどく熱意を欠いていた――あたかも人間は財産ほど神聖ではないかのように。注意力散漫でエゴイストな国民においては、個人の自由という権利が所有権ほど手厚く保護されない、ということには一つ単純な理由がある。自由を奪われた人間はこの事実そのものによって一切の方策を拠がれることになるが、所有権を取り上げられた人間にはそれを要求するだけの自由が残っている。したがって、自由は虐げられた者の味方によってしか擁護されえないが、所有権は抑圧を蒙った本人によって護られることとなるのだ。これら二つの場合において訴えの強さがどれだけ異なるかは容易に見て取れよう。

我々の多くの共同体におけるかくも複雑な結びつきのなかでは、何もかもが関連しあっている。副次的と称される類の不正義は、公共の不幸の尽きぬ源泉である。それを限られた領域に閉じ込めておくことは権力にもできない。不正を隔離する術はないのだ。ただ一つの野蛮な法によって立法全体の性格が決定されてしまうだろう。かたわらに一つでも不法な手段があれば、いかなる正しい法も不可侵であり続けることはできない。ある人々に自由を拒みながら、他の人々にそれを与えることはできない。有罪を認めていない人々に対する過酷な措置を想定すれば、一切の自由が不可能となる。出版の自由？　それは、あるいは無実かもしれない犠牲者に有利なほうへ人々の心を動かすのに用いられるだろう。個人的自由？　追われる者は、追跡の手から逃れるためにそれを利用するだろう。産業の自由？　追放された人間に資力を提供する手段となるにちがいない。したがってこれらはすべて枷を嵌め、また等しく根絶させねばならないのだ。人間は正義をうまく誤魔化し、何か障害があった時には一日くらいこの領域を抜け出し、それからまた秩序のもとへ復帰することを望む。彼らは規則によ

る保証と例外の成功とを求めるだろう。自然はそれに逆らう――その体系は完全であり規則的である。たった一つの逸脱が、この体系を崩してしまうのだ。幾何学の計算においては、一桁の数字の間違いも千の位の間違いも等しく結果を歪めてしまうのと同じように。

第一二章　恣意的支配が知的発展に及ぼす影響について

人間が必要とするのはただ安寧、勤労、家庭の幸福や私的な美徳ばかりではない。自然は彼に、いっそう高貴とはいえないまでも、輝かしさでは劣らぬ能力をも与えたのである。これらの能力は他のどれにもまして恣意的支配によって脅かされる――暴政もはじめは自分の用途に従わせようと試みるが、抵抗にあって苛立つと、最後にはこれを窒息させる。

コンディヤックが述べている。「野蛮には二種類ある、一つは啓蒙の時代（les siècles éclairés）に先立ち、もう一つはその後に続いてやってくる」[2]。比較すれば前者のほうがまだしも望ましい状態といえよう。だが今日において恣意的支配が諸国民を引き連れていくのは後者の方角にほかならない。そしてこの第二の野蛮ゆえに彼らの堕落もいっそう速まるのだ。人々の品位を貶めるのは能力を持たぬことではなく、それを捨て去ることなのだから。

このような国民を仮定してみよう。教養深く、勤勉に何世代も積み重ねられた業績によって豊かさを得、あらゆる領域にそれぞれの傑作を掲げており、学問と芸術において偉大な発展を遂げている。もし政治権力が、思想の表明や精神の活動に枷を嵌めるならば、この国民もかつての資源に、つまりすでに獲得された知識に縋ってしばらくは生き延びるかもしれない。だがその思想においては何も革新されぬままとなるだろう。新たなものを生み出していた原理も干乾びてしまう。数年間、虚栄が知識への愛の代わりになるだろう。詭弁家らは、かつて文学上の成果が栄光と敬意をもたらしたことを思い出しながら、うわべだけはこの同じ領域の作品に寄与するはずだ。だがそれは著述によって生み出されてきた善に対し、著述で戦いを仕掛けることにほかならない。自由主義的な原理の痕跡が何かしら残ってさえいれば、文学のなかには運動の契機が、このような著作と原理に対抗するある種の闘争が宿りうる。しかしその運動は瓦解した自由の遺産となろう。最後の面影、最後の伝統が消滅させられるにつれて、攻撃を続ける利点も成功の望みも薄れゆき、日々無意味さを増していくことにな

る。すべてが消え去れば闘いは終わる、なぜなら闘争者たちはもはや敵の姿を眼にせず、勝者は敗者と同じく沈黙を守るであろうから。沈黙を強いるのが得策と政府当局が判断しないかどうかなど、一体誰が知ろう？　消滅した記憶を呼び覚ましたり放置された問いを討議したりするのは、彼らのお気に召さぬはずだ。熱狂がすぎる手下には、かつて敵にしたのと同じように圧力をかけることだろう。人類の利益について書き綴ることは、たとえ当局の意図に沿うものであっても禁止するであろう。どこかの信心深い政府が、善きにつけ悪しきにつけ神について語ることを禁じたのと同じように。どのような問いに対して人間の精神が発揮されうるかは明確に言い渡される。当局の意に適った囲いの中でならどんなに跳ね回ってもよろしいとお許しが出る、ただし服従の姿勢とともに、だ。しかし人間精神がこの囲いを越えようものなら激しい叱責が浴びせかけられるだろう――もしその崇高な起源を捨て去らず禁じられた思索に身を傾けるなら――もし自分の最も高貴な目標は、くだらぬ対象を器用に飾り立てることでも巧妙なお世辞を捻り出すことでもどうでもよい問題について朗々たる雄弁を揮うことでもなく、天とその本性が築いた永遠の法廷、一切が分析され、一切が吟味され、一切が終局的に裁定されるあの法廷にあるのだ、などと考えつこうものならば。こうして、本来の意味における思想の活動は決定的に封印される。教養ある世代は徐々に姿を消していく。続く世代は知的営為のうちに何らの利点も見出さず、危険さえ感じて、背を向けて遠ざかり二度と振り返ることはないだろう。

あなたがたは虚しくもこう仰るかもしれない。人間精神は軽妙な文学においてもなお輝きうる、精密な自然科学にも力を注ぐことができる、芸術にだって身を捧げられるではないか、と。自然は、人間を造ったとき政治的権威に相談などしなかった。我々の能力すべてが互いに親密な関係を結び、そのいずれかが束縛を受ければ他のすべてが影響を蒙らずにはいないよう、それが自然の望んだことだった。思想の自立は軽めの文学や科学、芸術においても、身体的生命にとっての空気と等しく必要不可欠なものである。精神に尊厳を思い出させ力を与えてくれるような重要な問題には取り組ませずに、その活動を与えられた主題だけに限定するくらいなら、いっそ空気ポンプのもとで人を働かせ、呼吸せずに腕と脚を動かせといったらどうだろうか。このようにして束縛を受けた物書きは最初のうちは賛辞を綴っているが、だんだんと称賛することさえ困難となり、文学は畢竟アナグラムと折り句（アクロスティッシュ）の暗号になって終わる。学者は

もはや過去の発見の保管者に過ぎず、その知識も鉄鎖に繋がれた両手の狭間で綻び朽ちてゆく。芸術家たちの才能の源泉は、自由のみが培うことのできる栄光への希望とともに枯渇する。そして、それぞれ切り離しうると人々が思い込んでいた諸事物間に存在する神秘的だが疑う余地のないある繋がりゆえに、人間の魂が品位を貶められれば、芸術家たちは人間の姿形を高貴な仕方で表現する能力を失ってしまうのだ。

なおこれですべてではない。やがて商業、そして最も欠かすことのできない職業および仕事がこのアパシーの悪影響を露にする。商業もそれだけでは十分な活動の動機とはなりえない。人は個人的利益の作用を過大視しすぎている。個人的利益が活動するためには何らかのオピニオンの存在が必要である。オピニオンを締め付けられ萎れさせてしまった人間は、たとえ利益によってであろうとさほど長く活発でいられない。ある種の自失状態が彼を覆ってしまう。そしてあたかも麻痺が身体の一部から他の部分へと広がるように、この昏迷も我々のある能力から別の能力へと伝染してゆくのである。

オピニオンから切り離された利益は、自分自身の欲求だけに限定されており快楽にも容易に満足を覚える。今この瞬間に必要なだけは働くが、未来のために何か準備することはない。そうして、オピニオンを抹殺したいと望み利益関心を焚付けているつもりでいた政府は、二重の、そして不手際な措置によって、両方の息の根を止めてしまったことに気づくのだ。

恣意的支配の下でも絶えぬ利益が、おそらく一つ存在する。だがそれは人間を仕事に導く類のものではない。それは人をして物乞いさせ、略奪に誘い、権力の恩顧で私腹を肥やし弱者から奪い取るよう唆す。この利益は、勤勉さを旨とする階級に必要な動機とは何の関わりも持たない。暴君の周囲には激しい活力を与えるだろう。だが産業の振興に対しても商業の推進に対してもいかなる方策も提供するまい。

知性の自立は軍事的な成功にさえも影響を及ぼす。国民の公共精神と軍隊の規律および勇猛心とのあいだに存在する連関は、一瞥では気づかれないが、しかし不変的かつ必然的な繋がりである。今日において人々は、巧みに操る術さえ覚えればよい従順な道具としてしか兵士たちのことを見ようとしない。これはある面では正しすぎる真実である。にもかかわらずこの兵士らは、自分たちの後ろに何らかの世論が存在するという意識を間違いなく抱いている。この

意識は、彼ら自身もほとんど知らぬまに兵士たちを動かしており、この兵らが響きに合わせて敵に突進する時のあの音楽にも似ている。その響きに一貫した継続的な注意を向ける者は一人もいない。だがそれによって誰もが心を動かされ、勇気づけられ、突き動かされる。フリードリヒ大王は、その軍隊とともにプロイセンの公共精神をもって、同盟したヨーロッパを撃退したのである。この公共精神は、かの君主が常に知的能力の発展に許していた自立によって形成されていたものだった。七年戦争のあいだに彼は幾度も敗北を喫した。首都は陥落し、軍隊は潰走した。だが彼とその国民との間には、彼らを結ぶ不可思議な回復力が存在していた。臣民の願いが護り手たちを感化した。世論のムードともいうべきもので臣民は彼らを支援し、励まし、その力を倍増させたのだった。*

*八年前に私が記したこれらの考察は、その時以来、真の原理が収めた確定的な勝利の際立った証を示してくれた。啓蒙された国民の道徳的力を表す例として私が描いたプロイセンは、突如としてその精力と勇猛な徳を失ったかに見えた。私が著作を送り届けた友人たちは、イエナの戦いの後、公共精神と勝利との関係はどうなったのかと尋ねてきた。だが数年が経ち、プロイセンはその失墜から再び立ち上がり諸国列強の第一線に並ぶまでとなった。彼らは未来の世代からの感謝、人類のすべての友の尊敬と熱烈な賛辞に対する権利を獲得したのである。

このような、ある著述家たちの集団からは物笑いの種としか思われぬことを何行か綴っていても、私には自分を偽るつもりはまったくない。彼らは、人類の政府には道徳などかけらも存在しないのだと力の限りに訴える。持てる能力のすべてを、そうした能力の無益と無力とを証明するのに用いる。そしてわずかばかりの非常に単純な要素で社会状態を構成してみせる――すなわち、人々を欺く偏見、怖れをよぶ煩悶、堕落させる渇望、品性を貶める軽薄さ、支配し操るための専断、わけても欠かせないのが、この恣意的支配を巧みに利用するための実利的な知識と厳密な学問である。これが四十世紀間にも及ぶ営みの行き着く果てだとは、私にはどうにも信じられないのだが。

思想（la pensée）こそはすべてのものの原理である。産業にも兵学にも、すべての学問、すべての技芸にそれは適用され、進歩を促す。しかるのちこの進歩を分析しながら、思想は自らの地平を広げてゆく。もし恣意的支配がこれを拘束しようと望むならば、それによって道徳はいくらかの健全さを、*事実認識は精確さを、科学はその発展にお

ける活発さをそれぞれに失い、兵学は歩みを遅らせ、産業は新たな発見によって富を得ることが少なくなるだろう。

＊バローの中国旅行〔Sir John Barrow, *Travels to China*, London, 1804〕は、支配的権威によって無気力に追い込まれた国民が、他のすべての側面と同様、道徳においてどのような存在と成り果てるかを証明するのに有益であろう。

最も高貴な部分に攻撃を受けた人間存在は、すぐさまいちばん遠い部位にまで毒が回ってゆくのを感じる。せいぜい高貴さを空虚な自由に閉じ込めるか、無用な見栄を奪うだけのつもりだったのに、有毒な武器がその心臓を一突きにしてしまったのだ。

人々がしばしば口にする循環の輪のことは、私も一応知っている。人間精神はそこを巡っており、循環は避けがたい運命によって開明の次には無知へ、文明に続いて野蛮へと導くのだと言われる。しかしこの仕組みにとっては不運なことに、暴政は常にこれらの時代の間に忍び込んでくるのだ――そうして引き起こされる革命が包含する何事かのゆえに、この侵入を非難せずにはいられぬような仕方で。

諸国民の歴史に見られるこうした有為転変の真の理由は、人間の知性が定常したままではいられないということにある。引留められないかぎり、知性は前進するだろう。だが引留めれば後退してしまう。気概を殺ぐようなことをすれば、どんな対象にも気怠げにしか働かなくなる。人々は言う、知性は自己の本来あるべき領域から排斥されたことに憤慨し、高貴な自殺によって自分に加えられた恥辱に復讐しようとするのだ、と。

自分の都合や一時の幻想にまかせて諸国民をまどろませたり目覚めさせたりすることは、政治的権威の権力にも許されていない。生は、誰かが代わる代わる取り上げたり返したりできるようなものではないのだ。

もしも政府が、束縛された世論の自然な働きを自分自身の活動によって補おうと欲するなら、あたかも限られた空間のなかで繋いだままの馬を円柱のあいだに後ろ足で立たせるがごとき困難な仕事を引き受けたことになるだろう。

第一に、全く人為的な興奮というものは持続させるのに高い代価を要求する。各々の人間は自由である時、自分の為すこと、語ること、書き綴ることに関心を抱き、それを楽しんでいる。だが国民の大多数が沈黙を強いられた観客の役回りに押し込められている時には、この観客が喝采するため、あるいは単に彼らが眼を向けるためにでも、見物の支配人はどんでん返しと場面転換によってその好奇心を目覚めさせる必要がある。

さらに、この紛い物の盛況は実態というより外見上のものである。一切が動くとしても、それは命令と脅しによってに過ぎない。何もかもが容易く運ばないのは、何もかもが自発的でないからだ。政府は支えられるのではなく、むしろ服従の対象となる。ほんのわずかな中断でもすべての歯車は停止してしまう。それはチェスの駒のようなものである。権力の手がそれを動かす。どの駒も抵抗しない。だがもし一瞬でも腕が止まれば、それは完全に不動となる。

そして最後に、世論を欠いた国民の麻痺状態は必ずやその政府にまで伝染するであろう、たとえ何をどうしようとも。国民の眼を覚まさせたままにすることができず、結局政府は彼らとともに眠り込む。したがって、誰もが沈黙し、衰弱し、退歩し、隷属化した思想を持った国民のもとではそうして一人残らず堕落することになる。遅かれ早かれこのような帝国は、ピラミッドが乾いた砂に重く伸し掛かり静まり返った砂漠を支配する、かのエジプトの平野のごとき様相を呈するに至るだろう。ここで我々が描き出した歩み、それは理論ではなく、歴史である。ギリシア帝国の歴史、ローマの後継として膨大な実力と知識の一切を授けられ、恣意的な権力をその安定性にとり最も有利な根拠のすべてを用いて確立しながら、いずれにせよあらゆる専断は衰亡せねばならぬという定めにしたがって衰退し滅び去った、かの帝国の歴史なのである。それはフランスの、自然と運命の恵みを享けたこの国の歴史ともなろう――もし専制政治が、長いあいだ対外的な勝利の虚しい輝きで偽ってきた隠然たる抑圧に固執しつづけるならば。*

*もしより多くの証拠を挙げる気があれば、私はここでも中国について語ることができたろう。この国の政府は思想を純粋な道具に変じるほどの支配に成功した。学問は命令に基き、政府の指導と統制に従ってのみ研究された。新たな道をあえて切り拓いたり、命じられた見解の方向性から逸れたりする者は一人もいなかった。したがって中国は、数では中国人に劣る異民族からの侵略を幾度も繰り返し蒙っていた。精神の発展を滞らせるために必要とされたのは、彼ら自身と彼らの政府とを守るのに役立っていた原動力を挫くことだった。ベンサムは次のように述べている。無名の民の首長たちはその狭窄で臆病な政略の犠牲者となって果てるのが常であった、と（*Principes de Législation*, III, 21）。これら幼くして年老いた諸国民は、支配しやすいように彼らの愚かさをそのままにしていた後見人たちの支配下で、最初に訪れた侵略者に対しいつでも安価な生贄を提供したのだった。

最後の考察を付け加えることにしよう、ここにもそれなりの重要性はある。思想にまで手を掛けた恣意的支配は、

才能に対しその最も美しい舞台の扉を閉め切ってしまう。だが、才覚ある人々の誕生を妨げる術までは持たぬ以上、彼らの活動は必ずや活路を見いだす。果たして何が起きるだろう？　彼らは二つの集団に分かたれる。自らの本来の使命に忠実な人々は政治的権威を攻撃するであろう。その他の者はエゴイスムに身を投じ、自分たちに残された唯一の慰めとして、快楽のあらゆる手段を掻き集めるのにその卓越した能力を用いることになろう。こうして暴政は才気のある人間を二つに分かつ。一方は叛徒となり、他方は堕落する。彼らは罰せられるであろう、しかも避けがたい罪によって。もし彼らの野心がその高潔な希望と努力のために自由の余地を見出していたなら、前者はなお平和的であり、後者はなお品位を保っただろうに。歩みを進める権利を持った自然の路上から追い払われたのでなければ、罪深い道をあえて求めたりはしなかったはずなのだ。私は彼らがその権利を持っていたと言おう、なんとなれば顕揚、名声、栄光は人類に具わったものなのだから。誰もこうしたものを同胞から正当に奪うことはできず、生に輝きを与えるものを引き剝がし卑しめることなど許されないのだ。

人間に与えられる報いを彼自身をも超えたところに置いたこと、かのとらえがたい栄光の光輝（cette flamme indéfinissable de la gloire）を人の心の中に灯したことは、自然の定めた美しい理の一つであった。すべての偉大な行為の源泉となり一切の悪徳を斥けさせる、そしてまた世代と世代とを結び人間と宇宙とを繋ぐべき高貴なる望みを糧として、蛮野な欲求の数々をはねつけ卑しい快楽を軽蔑するのは、まさしくこの輝き、燃焼にほかならない。この聖なる炎を消す者に禍あれかし！　彼はこの世において悪しき原理のはたらきを担う。彼は鋼鉄の手をもって我々の額を地へと俯かせてしまう――頭を高く掲げて歩み、星々を眺めて思いを致すよう天によって創られたはずの我々であるのに。

第一三章　恣意的支配の下にある宗教について

人は言うだろう、最も横暴な統治形態のもとでさえ一つの避難所が人間には残されていると――宗教である。そこには密かな苦悶を吐き出し、最後の希望を託すことができる。そしていかなる権威もこの隠れ家まで追って来られるほどに巧妙かつ鋭敏であるとは思えない。しかし、それでも暴政の手は人を追ってここまで届くであろう。[3] 政府にとっては独立しているというだけで一切合財が苛立たしいのだ、自由なものは何もかも自分を脅かすがゆえに。かつて

暴政は宗教的な信念を統御することを望み、そこから好きに義務やら罪やらをこしらえられると考えていた。今日では経験からよく学んだ結果、もはや宗教に対し直接的な迫害を指揮したりはしないかわり、これを貶めることのできるものを待ち望んでいる。

時に暴政は、国民に対してのみ宗教を必要なものとして奨励することがある。その場合政府は、国民が自分の頭上の趨勢を不謬の直観で悟っており、したがって上位に立つ人々が軽蔑するものに敬意を払ったりせぬこと、そして人真似か自尊心かによってそれぞれが宗教を低い地位へとおしやるだろうということを、十二分に意識している。またある時には宗教を自分の気紛れにしたがわせ、暴政はそこから一個の奴隷を生み出す。それはもはや地を轟かし改めるために天から降り来る、神聖な力ではない。従順な従者、臆病な道具となって宗教は権力に跪き、その振舞を伺い命令を仰ぎ、自分を軽蔑する相手にへつらって、諸国民に永遠の真理を説く時にも権威の意向に従うばかりである。聖職者たちは鎖に繋がれた祭壇の下で改竄された文句を口籠る。古の穹窿（きゅうりゅう）を勇気と良心の調べで鳴り響かせることなどとてもできない。ボシュエのように、この世の権力者に向かって王の裁き手たる厳格な神について講ずるどころか、彼らは支配者らの軽蔑しきった視線のなかに、どうやって彼らの神について語るべきかを怯えながら探るのがせいぜいなのだ。彼らが非人間的な法律や略奪者の命令を宗教的裁可によって支持するよう強いられなければ、まだしも幸いだったものを！　嗚呼この恥辱！　平和な宗教の名において侵略と虐殺を命じ、政治上の詭弁で聖なる書物の崇高を穢し、福音の説教を声明文へと歪め、罪の勝利のために天を称え、共謀を吹聴して神の意志を冒瀆する――それが衆目のまえで彼らの為したことだった。

こうした数々の卑屈な振舞が彼らを侮辱から免れさせたなどとはお考えにならぬよう。留まるところをしらぬ人間は時に突然の錯乱に囚われてしまい、それがためにいかなる抵抗も彼に理性を取り戻させることができなくなる。儀式のなかにアヌビス神の像を運び込ませたコモドゥスは、突如この虚像を棍棒に変え、彼に付き従っていたエジプトの神官を殴り倒そうと思いついた。*この象徴的な出来事は、我々の眼下で何が起きているのかを――庇護しているものを虐待し命じたばかりの内容を貶めることで密かな勝利を味わおうとする、あの尊大で気紛れな庇護者の姿を克明に描き出しているといえよう。

* [Aelius] Lampridus in [*Historiae Augustae Scriptores*]

Commodo, cap. IX.

宗教はこれほどの堕落とこれほどの陵辱に耐えうるものではない。愛想をつかした眼はその荘厳さから逸れ、萎れきった魂はその希望から離れてゆく。

次の点を認めぬわけにはいくまい。開明を遂げた国民にとっては、暴政が摂理の実在に対する最も強力な反論となるのだ。それが開明を遂げた国民にとってのことだと言うのは、未だ無知な国民であれば宗教的信念を貶めぬまま抑圧に従うことが可能だからである。しかし一度でも人間の精神が合理的思考の道に踏み込めば、そして不信仰が生を享けたなら、暴政の光景はこの不信仰が主張することを恐るべき明証さで基礎づけるように映るだろう。

不信心は人間に語ってきた。いかなる正しき存在も自らの運命に心を配ることはなく、そしてその運命は事実、人間の最も獰猛で下劣な気紛れのまえに打ち捨てられてきたのであると。美徳の報い、罪の被る罰、叶わなかった信仰の約束、そうした一切のものは脆弱で卑屈な想像力の生み出した幻影に過ぎない。報いを受けるのは罪であり、罰せられるのは美徳のほうである。この束の間の生、奇妙な出番を務めるあいだ、過去も未来もなく現実とも思えぬほどのわずかな時間において最も価値ある行為といえば、我々を飲み込もうと待ち構える奈落に対して眼を瞑るため、刹那を味わい楽しむことである。専制政治[4]もまた同じ教訓をその一挙手一投足で説いている。それは災禍で人間を取り囲み、しかるのち彼を逸楽へと誘い込む。今を生きよ、次にはどんな時間が続くのかわかったものではないのだから。叡智と善性の支配は蔭に隠れ、眼に映るのは苛酷と狂気の支配ばかりであれば、その下で希望を抱くにはよくよく強力な信仰が必要であろう。

だがそうした力強い不屈の信仰は、おそらく歴史ある古い国民の運命とはなりえない。開明を遂げた人々の集団は反対に、不敬虔のうちに自分たちの隷属に対する惨めな埋合せを見出そうとする。大胆さを装い、もはや畏怖を抱かなくなった権力に挑みかかることで、懼れているほうの権力に対し卑屈な態度を取りながらも自分がいくらか軽蔑すべき状態から脱したように感じるのだ。来世が存在しないという確信は彼らにとって現世における汚名の慰めになる、とさえ言いうるだろう。

にもかかわらず、人々は当代の啓蒙を、霊的権力の崩壊を、国家と教会との闘争が全面的に終結したことを褒めそやす。私自身は、誓って言うが、もしどちらか選ばねばならないとすれば宗教の軛のほうを政治的専制よりも好む。

前者のもとでは少なくとも奴隷のうちには信念が宿り、腐敗しているのはただ暴君のみである。だが抑圧が一切の宗教的観念から切り離されれば、奴隷もまた支配者たちと同じように堕落し卑しく成り果てるのだ。

迷信と無知という重荷に背を屈めている国民は憐れむべきだが、敬意を表することもまた可能である。こうした国民はその誤謬のなかに誠意を留めている。今なお義務の感覚が彼らを導き、たとえ誤った方向へ導かれるとしても美徳をその身に具えることはできる。しかし不信心の召使たちは従順に這い蹲り、熱狂に突き動かされ、神々を否認しながら一人の人間のまえに怯え、原動力といえば恐怖ばかり、自分たちを抑圧する王座の高みから投げ渡される給料のみを唯一の動機としているのだ。自ら望んだ退行の路程を歩むあいだ、気分を高揚させる幻想も弁明となる誤謬も持たぬ人種、このような人々は摂理が人類に与えた地位から転げ落ちていった。人類に残された能力および彼らの示す知性は、人類にとっても世界にとっても、ただ不幸と恥の上塗りに過ぎないのである。

(1) Cornelius de Pauw を指していると思われる。その著作 *Recherches philosophiques sur les Grecs*, 2 vol., Berlin, 1788 は、コンスタンの「古代人の自由」観の重要な典拠となっている。

(2) Etienne Bonnot de Condillac, *Introduction à l'étude de l'histoire*, in *Cours d'études pour l'instruction du Prince de Parme*, 12 vol., Genève, 1775, t. 4, p. 2.

(3) 初版では「暴政」(despotisme) が「恣意的支配」(arbitraire) となっている。

(4) 初版では「専制政治」(despotisme) が「恣意的支配」(arbitraire) となっている。